

# 2021年 6月 27日(日) 関東学院教会 主日礼拝 説教要約

説教「命のリレー」 マタイによる福音書 14章1-12節 高橋彰

## ◆洗礼者〔バプテスマの〕ヨハネ、殺される

14 1 そのころ、領主ヘロデはイエスの評判を聞き、2 家来たちにこう言った。「あれは洗礼者ヨハネだ。死者の中から生き返ったのだ。だから、奇跡を行う力が彼に働いている。」3 実はヘロデは、自分の兄弟フィリポの妻ヘロディアのことでヨハネを捕らえて縛り、牢に入れていた。4 ヨハネが、「あの女と結婚することは律法で許されていない」とヘロデに言ったからである。5 ヘロデはヨハネを殺そうと思っていたが、民衆を恐れた。人々がヨハネを預言者と思っていたからである。6 ところが、ヘロデの誕生日にヘロディアの娘が、皆の前で踊りをおどり、ヘロデを喜ばせた。7 それで彼は娘に、「願うものは何でもやろう」と誓って約束した。8 すると、娘は母親に唆されて、「洗礼者ヨハネの首を盆に載せて、この場でください」と言った。9 王は心を痛めたが、誓ったことではあるし、また客の手前、それを与えるように命じ、10 人を遣わして、牢の中でヨハネの首をはねさせた。11 その首は盆に載せて運ばれ、少女に渡り、少女はそれを母親に持って行った。12 それから、ヨハネの弟子たちが来て、遺体を引き取って葬り、イエスのところに行き報告した。

聖書 新共同訳(C) 日本聖書協会 Japan Bible Society, Tokyo 1987, 1988

イエスのガリラヤでの宣教活動の評判が広まってゆきました。多くの群衆はイエスに期待し、集まるようになります。一方で逆の反応もありました。故郷ナザレでは、人びとはイエスにつまずいたとあります。「預言者が敬われないのは、その故郷、家族の間だけである」とのイエスの言葉も記されています。諸福音書の記述ではイエスに対する憤りのために人びとが崖から突き落とそうとまでします(ルカ4:29)。また、イエスの評判を聞いて心騒がせる人がいました。ガリラヤ地域の「領主」と記されたヘロデです。

ヘロデ・アンティパスは、イエス誕生の時期に登場したヘロデ王(2:1)の息子の一人です。ヘロデ王の死後、ローマの了承のもと息子たちに領土が分割され、紀元4年から39年までガリラヤとペレアの地域の領主となり統治しました。彼は隣国ナバテヤ王国のアレタ王の娘と結婚していましたが、ローマ皇帝への謁見に赴いた際、ローマに滞在していた異母兄弟ヘロデ・ボエトス(14:3ではフィリポと書かれていますが史実ではボエトスだと言われます)の妻でありヘロデ王の孫にもあたるヘロディアと出会い、彼女を説得して自分の妻にと奪ってしまいます。そしてアレタ王の娘と離縁します。その横暴を「律法では許されていない」と厳しく批判したのが、あのバプテスマの(洗礼者)ヨハネでした。前妻との離縁はユダヤの律法では適っていても、生きている兄弟の妻を奪って自分のものにするとは律法に反している(レビ18:16、20:21)と非難したのです。大王と呼ばれたヘロデ王の息子であり、ガリラヤ地域の覇者として君臨し、魅了された女性を奪って妻にし、群衆から預言者と呼ばれ影響を与えたバプテスマのヨハネをも捕らえて牢に閉じ込め(5節)、持てる力を自由自在であるかのように自分のために用いて横暴の限りを尽くします。そんな領主ヘロデを皮肉にも「王」(9節)と記します。ヘロデはヨハネを「殺そうと思って」(5節)いましたが、その機会が訪れます。自身の誕生日の宴席にたくさんの客が集まります。ヘロデは皆の前で自分が手に入れた妻の娘が踊る(普通は奴隷の娘がさせられていた行為と言われます)のを見せびらかして威信を示し、たいそう喜び、「願うものは何でもやろう」(7節)などと言います。エステル記のクセルクセス王の言葉を思い起こさせられます(エステル5:6、7:2)。

満悦のヘロデの傲慢な約束に、娘はヨハネの首を要求します。「唆す」は「前に進みださせる」という言葉です。娘(と妻)の要求は、ヘロデの心中にありながら民衆を恐れて実行できずにいた「ヨハネを殺そう」(5節)という本心の欲求、心の闇を照らして後押しし、顕わにさせます。そうしてヘロデはヨハネの首をはねさせ、自分の欲望を果たします。律法に反することを平気で行ってきたヘロデは、誓いを守ることも自分の欲求の実現と、周りへの体面のためになすのです。ヨハネの首は屈辱的に盆に載せて運ばれます。ヨハネの命は権力者たちの手から手へたらい回しにされて軽んじられます。旧約の預言者たちはそのようにされてきたのです。ユダヤ古代誌家ヨセフスは、ヘロデによるヨハネ逮捕は、民衆に影響のあるヨハネを恐れ、民衆扇動罪の疑いをかけて、反乱防止のために行ったのだと記しています。

しかし覇者であるはずのヘロデの感情は常に激しく揺さぶられています。恐れ(5節)、喜び(6節)、心を痛め(9節)ます。自由な者であるようで、ヨハネを殺した後までも、その事実が心を占め続け、イエスの評判を耳にした途端にヨハネ殺害の出来事が頭をよぎり、それが恐れと記憶として心にフラッシュバックしてよみがえります。ヨハネ殺害は不本意だったが娘と妻が唆したのだと自らに言い聞かせるかのようです。このような責任転嫁の言動こそ、律法(創世記～申命記)では罪に捉えられた姿だと物語られていたのではなかったでしょうか(創世記3章)。

ヨハネのヘロデへの非難は、個人的な罪の指摘にとどまりません。隣国ナバテヤ王の娘との一方的な離縁は、両地域の関係に亀裂を生み、武力衝突へと展開しました。ヘロデは戦いに負け、ガリラヤの民衆も大きな犠牲を払われ、被害を受け、血が流されました。ヨハネが厳しく批判したのは、民に苦難をもたらす暴力、殺戮を生じさせる為政者を監視し、法を以て批判抗議する訴えでした。ヨハネの死は弟子たちによってイエスに伝えられます。命のバトンを受けるように、イエスは退かれ、ヘロデの宴席と全く対照的な食卓が開かれることになります。